2026/11/26
エルシーアイ株式会社
ケータハムカーズ・ジャパン

CATERHAM CUP JAPAN OBERON Series
Rd.3@岡山国際サーキット レースレポート



【プロローグ】

世界各国で開催される「CATERHAM CHAMPIONSHIP」をモチーフに、日本市場に合わせたナンバー付きの SEVEN 170 をベースとし、FIA 基準適合の安全装備を施した「SEVEN 170 CUP」によるワンメイクレースという新たなカテゴリーとして誕生した「CATERHAM CUP JAPAN」。開幕イヤーとなる 2026 年は、東日本・西日本の各シリーズがそれぞれ年間 3 戦・全 6 戦でタイトルを争ってきました。

すでに東日本シリーズ「PETRONAS Syntium Series」は、最終戦の筑波サーキット（茨城県下妻市）で年間チャンピオンが決定。そしていよいよ今シーズンのフィナーレとなる、西日本シリーズ「OBERON Series」最終戦が、11 月 23 日に岡山国際サーキット（岡山県美作市）で行われました。





エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/

【予選】

CATERHAM CUP JAPAN 西日本シリーズ「OBERON Series」最終戦の舞台となった岡山国際サーキットは、朝から快晴となったものの、折からの寒冷前線の影響で早朝は氷点下まで冷え込み、予選のコースイン時刻である 10 時 30 分になっても路面温度が上がらない状況です。プラクティスを兼ねた 30 分間の長い予選セッションにコースインした全 11 台は、入念にタイヤに熱を入れながら徐々にペースを上げていきました。



そんな中、今回のゲストであるレーシングドライバーの#14 藤原選手（賞典外）が序盤から 1 分 57 秒台後半をマークすると、#55 竹内選手、#80 佐藤選手（賞典外）、#5 中里選手もペースアップし、1 分 59 秒台でコンスタントに周回を重ねます。その後、タイヤが温まった 6 ラップ目には#55 竹内選手も 57 秒台をマーク。練習走行から徐々にアタックモードへと切り替えていった#8 萩野選手、#37 大野選手、#9 安達選手らも、#14 藤原選手に牽引されるようにベストタイムを更新していきます。

CATERHAM CUP JAPAN のワンメイクタイヤとなるヨコハマタイヤ「ADVAN dB V553」ならではの、安定したグリップの持続性もあってか、セッション終盤の 12 ラップ目に#14 藤原選手が 1 分 57 秒 451 までベストを更新し、ポールポジションを獲得。続く#55 竹内選手はセクター1、2 でベストタイムを叩き出し、#14 藤原選手に迫る 1 分 57 秒 560 で 2 番グリッドを手にしました。タイヤの空気圧調整を終えてふたたびアタックに入った#5 中里選手は、1 分 58 秒 002 でセカンドローの 3 番手に。一方、ここまでタイムが伸び悩んでいたランキングトップの#9 安達選手は、セッション最終盤まで粘って 1 分 59 秒 508 をマークし、4 番手の#80 佐藤選手にコンマ 2 秒差まで食らいつきました。





エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/

【予選コメント】

予選 1 位 / #14 藤原 優汰選手 / 1 分 57 秒 451（賞典外）

「SEVEN 170 CUP はコントロールしやすいので、新品タイヤでニュートラルなバランスに設定しました。ブレーキがロックしやすいので色々とトライしながら丁寧に転がしていきましたが、終盤はみなさんに追いつかれそうでしたね。決勝はしっかりとしたレースをして、負けないように頑張ります」

予選 2 位 / #55 竹内 大樹選手 / 1 分 57 秒 560

「今回は新品タイヤにしっかり熱を入れてタイムアップを図りました。30 分の予選では、走りながらクルマと自分のドライビングを慣らしていった感じです。これまでの 2 戦はレース中にスピンするじゃじゃ馬ぶりを発揮してしまったので、この最終戦では荒さを抑えて安定したレースをしたいです」

予選 3 位 / #5 中里 紀夫選手 / 1 分 58 秒 002

「長い予選セッションだったので、途中でエアを調整するなど、ボチボチ様子を見ながらアタックしました。SEVEN 170 CUP は相変わらずブレーキが難しいですね。再度コースインした後は#14 藤原選手に引っ張ってもらってペースが掴めたので、決勝はこの感触のまま、ひとつでも上に挑戦したいです」





【決勝】

日差しが心地よい午後になっても、レーシングコースの路面温度は 22℃と上がりきらない状況です。とはいえ、前 2 戦がウェットコンディションだったことを考えれば、初めてドライ路面でのレースに挑む参戦ドライバーたちの期待感の高まりは想像に難くありません。定刻通り 14 時 20 分にコースインし、フォーメーションラップで慎重にタイヤを温めた全 11 台がグリッドに整列。シグナルブラックアウトとともに、西日本シリーズ「OBERON Series」最終戦の決勝レースがスタートしました。



エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/

ここでセカンドローのアウト側から切り込んだ#5 中里選手がホールショットを決めて先頭に立ち、#55 竹内選手と#14 藤原選手が続きます。その後方では#9 安達選手と#80 佐藤選手がポジションを入れ替えながらオープニングラップをクリアしていきました。ラインの交差を避けて一旦#55 竹内選手の後ろに引いていた#14 藤原選手がふたたびトップで集団を牽引すると、ヘアピンでは 3 ワイドの攻防が展開されるなど、序盤から白熱のバトルが繰り広げられます。

レース中盤以降は#14 藤原選手がペースアップして単独トップに。2 番手に返り咲いた#55 竹内選手と#5 中里選手の後方では、#9 安達選手、#80 佐藤選手、#8 萩野選手が 4 番手争いを展開します。やや離れて#37 大野選手と#62 田原選手が続き、#7 木村選手と、東西両シリーズに参戦する#20 坂倉選手、#13 吉田選手がグループを形成してポジションアップを狙いました。





レース終盤にいくつかのポジションが入れ替わったものの、全 8 ラップの決勝レースはそのまま無事にフィニッシュ。ポール・トゥ・ウインの#14 藤原選手と 4 番手の#80 佐藤選手が賞典外となるため、#55 竹内 大樹選手が最終戦で初優勝を飾り、#5 中里 紀夫選手が 3 戦連続表彰台となる 2 位を獲得しました。

そして初年度となる西日本シリーズ「OBERON Series」は、最終戦を 3 位で終えた#9 安達 准平選手がトータル 55 ポイントを獲得し、初代シリーズチャンピオンに輝きました。





エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/



【決勝コメント】

決勝 1 位 / #55 竹内 大樹選手 / 1 分 57 秒 205（ベストラップ）

「スタートで#5 中里選手にパスされてから頭の中が真っ白になってしまい、ペースを抑えるのも忘れて、途中でコースアウトするまで夢中で攻めていました。レース終盤は#14 藤原選手を追いかけているうちに落ち着けました。本格的なレース参戦は初めてでしたが、とても楽しめました」

決勝 2 位 / #5 中里 紀夫選手 / 1 分 57 秒 799（ベストラップ）

「#14 藤原選手が配慮してくれたので好スタートが切れました。ヘアピンでの#55 竹内選手とのバトルは緊張しましたが、やっぱりドライのレースはいいですね。レース終盤まで集中力を保つのはキツかったですが、CATERHAM CUP はクルマとパワーのマッチングがいいですね。この 1 年間は楽しめました」

決勝 3 位 / #9 安達 准平選手 / 1 分 59 秒 191（ベストラップ）

「初代チャンピオンを意識したらドキドキして眠れませんでした（笑）。今回はストレートが伸びなかったので、ドライ路面は難しいのかなと感じていましたが、#80 佐藤選手とバトルをしてみてマシンの不調だと分かりました。来シーズンは万全の準備をして、東西両シリーズに挑戦したいです」









エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/

《 ケータハム 》

ケータハム（ケータハム・カーズ・リミテッド）は、1973 年にグラハム・ニアンがロータスの創業者コーリン・チャップマンから「SEVEN」の製造設備、設計図、デザイン、そして独占権を獲得して以来、軽量で 2 人乗りのスポーツカーを生産しています。チャップマンへの敬意を込めて、ケータハムは現在も「走る楽しさ」をすべての活動の中心に据えた哲学を貫いています。顧客一人ひとりに合わせたパーソナライズされた体験の提供に力を入れており、好みや走行スタイルに応じて理想の一台を仕立てられる豊富なオプションを用意しています。公道走行用からサーキット仕様まで、幅広いニーズに対応しています。

英国の自社工場でのみ生産されるケータハムの車両は、現在ケント州ダートフォードに本社を構え、1987 年以降、完成車およびキットカーの形態で製造を続けています。2023 年時点で、世界 15 の主要市場において 30 以上の正規販売店ネットワークを展開しています。

また、モータースポーツ部門の一環として、あらゆるレベルのドライバーを対象とした英国の 5 つのレースシリーズを運営しています。1995 年以来、エントリーレベルのレースシリーズであるケータハム・アカデミーでは、1,300 人以上の初心者ドライバーがレーシングドライバーとしての資格を取得しました。ケータハムは、日本最大級の自動車ディーラーグループの一つである VT ホールディングスの傘下にあります。VT ホールディングスは、2009 年よりケータハムの日本における輸入総代理店であるエスシーアイ株式会社も傘下に置いてきましたが、同社は 2026 年 4 月 1 日付でエルシーアイ株式会社へ吸収合併され、現在は VT ホールディングス傘下のエルシーアイ株式会社がケータハム輸入総代理店業務を継承しています。

<本件のお問い合わせ先>
エルシーアイ株式会社　ケータハムカーズ・ジャパン　広報：森田　恭平
東京都大田区石川町 2-1-1　TEL：03-5754-2227
MAIL：morita@caterham-cars.jp